

アストロツーリズムを通じた持続可能なまちづくりの取り組み

—鹿児島県与論町を事例に

澤田 幸輝 ・ 尾久土 正己 (和歌山大学)

Sustainable tourism development through Astro Tourism : Example of Yoron town, Kagoshima prefecture

Sawada Koki / Okyudo Masami (Wakayama University)

Abstract

In recent years, "Astro Tourism", which is defined as leaving their residence to look up at the beautiful starry sky, has been attracting attention. This report discusses sustainable tourism development through Astro Tourism in Yoron Town, Kagoshima Prefecture.

1. はじめに

観光学のコンテキストでは、「マス・ツーリズム」の対概念である「サステナブル・ツーリズム(sustainable tourism)」に関する議論が活発になされている。ジャンボジェット機の就航、インターネットの普及、近年では LCC の就航により、これまで富裕層しか享受できなかった観光というもの、一般市民、すなわち「大衆(mass)」でも楽しめる時代となった。しかし、観光開発に伴う環境問題や、ゲストとホスト間における経済格差、また現在ではオーバーツーリズムによる「観光公害」など、マス・ツーリズムによる弊害も顕在化している。「サステナブル・ツーリズム」とは、かかる諸課題の解決に向けた、マス・ツーリズムとは異なる新たな観光様式を指す概念である(安村, 2001)。サステナブル・ツーリズムは、概して、「経済」、「社会・文化」、「環境」の 3 要素、いわゆる「トリプルボトムライン説」にもとづく観光であるといわれている。しかし一部の研究者からは、実際の観光開発は「経済」偏重の傾向があることから、「経済」と「環境」、および「経済」と「社会・文化」との両立は困難であるとの意見も出されている(大橋, 2019)。

本報では、「アストロツーリズム」についての議論を行う。ここでは概略的に「美しい星空や天体を見上げるために居住地を離れる諸活動」と定義しておく(澤田・尾久土, 2020)。アストロツーリズムは、近年、サステナブル・ツーリズムの実現が可能なツーリズム形態として注目を集めている。本報では、著者らが活動している鹿児島県与論町を事例に、アストロツーリズムによる観光開発の可能性について概観する。また、著者らが与論町で行っている活動について、既存のまちづくり理論—「文化の仲介者論」を援用しながら、アストロツーリズムを通じたまちづくりモデルの提示を試みる。

2. 鹿児島県与論町での取り組み

和歌山大学観光学部と鹿児島県与論町では観光振興に向けた連携協定を結び、アストロツーリズムの共同開発を行っている。ここでは、著者らが行っている活動内容の一部を紹介する。

第一は、島民向け諸講座の実施である。これは、観光関連事業者および一般島民の両方に向けて行っている。観光関連事業者に向けては、「星空案内人講座」(柴田, 2007)を開講している。これは、「天文学に関する正確な知識を身につけること」および「エンターテイナーとして観光客を楽しませること」の 2 要素を重視した「プロガイド」養成を目指した講座となっている。現在のところ、30 人以上の島民が「星空案内人準案内人」の資格を取得している。一般島民に向

けては、広く天文学に関心を抱いてもらえるような取り組み、例えば、光害に関する講座や星空写真の撮り方講座などを実施している。6月21日に観測された部分日食では、島の小学生向けの観望会を実施した。また町工場の方からの協力の下、島内におけるLED防犯灯の上方光束軽減のための改良作業も行っている。

第二は、島内における星文化の伝承調査である。天文民俗学を専門にされている北尾浩一氏の協力の下、6月19日から25日にかけて、星文化や星の伝承に関する聞き取り調査を実施した。本調査は、与論島に伝わる「正しい」星文化を記録することを目的に行われた。まずは専門家の監修の下、正しい情報の記録・整理を目指している。今後は、筆頭著者を中心に調査を継続しつつも、そこでえられた調査記録をもとにした星文化の活用、すなわち観光の現場での活用にも取り組んでいく予定である。北尾氏によると、与論島には他地域では見られない独自の星文化が存しているという。アストロツーリズムを通じた観光政策を勘案した場合、与論島独自の星文化は他地域との差別化を図る際に非常に有用なものである。ここで肝要な点は、調査結果をもとにした正しい知識を観光現場で反映させることにある。調査結果にもとづく正しい文化を活用していくことは、翻って文化の伝承にもつながると考えられる。

第三は、観光客向けモニターツアーの実施である。観光客向けには、島内の星景スポットめぐりを中心に、無料のモニターツアーを実施している(図1)。ここで出た観光客からのフィードバックを参考にしながら、アストロツーリズムに相応しい観光地づくりに取り組んでいる。



図1:
モニターツアーの様子
(撮影: 尾久土正己)

3. 町内での新たな動き

前節では、著者らが取り組む活動内容について紹介してきたが、目下、その取り組みの効果が顕現するようになってきた。ここでは、島内で見られるようになった新たな動きを紹介する。

第一は、「星空案内人講座」受講者の中から、「星空ツアー」の造成および催行をする観光関連事業者が現れたことである。「星空案内人講座」受講者の1人で、プリシアリゾートヨロンでオプションツアーを担当しているAさんは、「星空案内人準案内人」資格取得後すぐに、「宙旅ツアー」の造成・催行に着手した。本ツアーは、ツアー参加者全員に「星空案内人講座」で使用した星座早見盤をプレゼントするなど、講座で取り扱った内容を軸にしたツアー構成となっている。Aさんによると、「宙旅ツアー」は、プリシアリゾートヨロンが扱うオプションツアーの中で一番の売れ筋になっているとのことである。Aさんの他にも、ツアー会社、民宿、バーなどで、アストロツアーの催行を模索している人たちが存在する。このように、「星空案内人講座」受講者の中から、事業立ち上げに向けて動き出す人が見られるようになっている。

第二は、一般島民の中にも星空に関心を持つ人が現れてきたことである。星空写真の撮り方講座を受講した与論高校のBさんは、自主的にネオワイズ彗星の撮影に取り組んでいた。Bさんは、写真講座の内容に触発されて星空写真を撮りたくなったこと、毎日場所を変えながら写真撮影に取り組んでいることを話してくれた。毎日場所を変えているという話から、光害の少ない場所を自発的に見つけようとしていることが読み取れ、写真撮影だけでなく光害にも興味を抱き始めていることが看取できる。徐々にではあるが、星空に関心を抱く一般島民が現れ始めていることが第二の動きである。

第三は、与論島の「星空」としての一面を、観光客に認知してもらえたことである。これは今後の参与調査が必要になってくるが、例えば、星空を目当てに与論島を訪れた、モニターツアーの参加者がリピーターになったなどを見出すことができれば、観光客への普及活動が確実になされていることが確認できる。

4. 考察

本節では、これまでの議論内容を 1 つのまちづくりモデルとして提示する。本報では、島川崇(2002:pp.103)の「文化の仲介者論」を援用する。島川(2002:pp.41)は、サステイナブル・ツーリズムを「観光客、観光関連企業、地域住民の『三方一兩得』をはかりながら、観光地の環境を破壊することなく長期的な展望をもって、観光地の経済活動を持続させていくことができる観光形態」と定義し、この「観光客」、「観光関連企業」、「地域住民」の均衡を保つ「文化の仲介者」の役割が、サステイナブル・ツーリズム推進に当たって重要であることを指摘している。本稿で議論してきたことを鑑みると、和歌山大学観光学部が、島川がいうところの「文化の仲介者」の役割を果たしていることが看取できる(図 2)。大学などの専門機関が「文化の仲介者」の役割を担うことによって、アストロツーリズムを通した持続可能なまちづくりを進めることができると

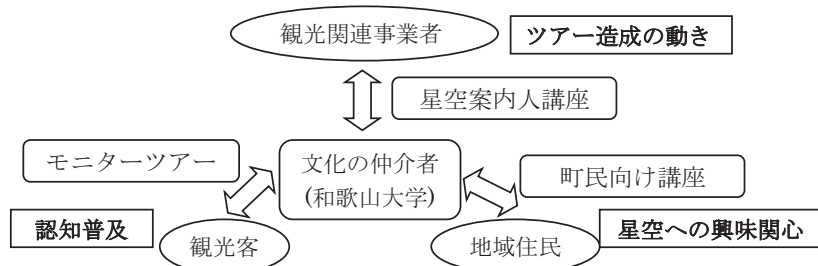


図 2: 与論町におけるまちづくりモデル

「社会・文化」が双方に対峙しないことが分かる(図 3)。「経済」に着目すると、これまで等閑視されてきた「ナイトタイムエコノミー」の創出を図ることができる(卯田・磯野, 2019)。同時に、美しい星空なしではナイトタイムエコノミーを享受できないことから、地域内において、必然的に光害防止運動が触発されることになる。これは、3 節で議論した通り、観光関連事業者だけでなく、一般島民からのそれも期待できる。したがって、「経済」と「環境」の双方は決して対峙することなく、むしろ両輪の関係にあるといえる。また「社会・文化」との関係を見ると、与論町では天文民俗学に関する本格的な調査をもとにした「星文化」の活用を目指していることから、「正しい文化」を基調にした内発的な文化活用が期待できる。これも「経済」と「社会・文化」が対峙しない例といえるだろう。

かかる視点に立てば、アストロツーリズムは、サステイナブル・ツーリズムを実現しうる非常

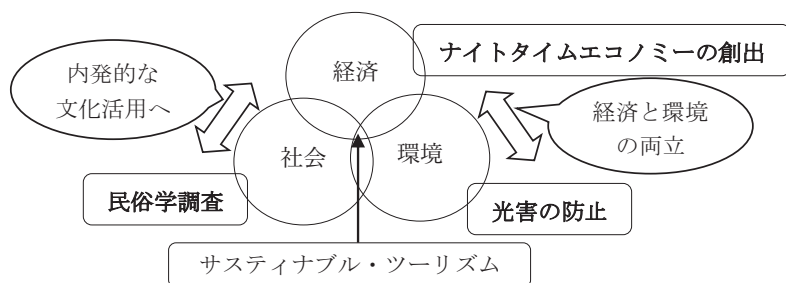


図 3: サステイナブル・ツーリズム実現に向けた与論町での取り組み

5. 結論

本報では、著者らが鹿児島県与論町で行っている取り組みを紹介し、島内で見られるようになった新たな動きを踏まえながら、観光学のコンテキストでの理論化、およびまちづくりモデルの提示を試みた。本報における結論は次の2点である。第一は、与論町における持続可能なまちづくりの取り組みは、和歌山大学観光学部が「文化の仲介者」としての役割を果たすことで、観光

考えている。

かかる点を踏まえた上で、「トリプルボトムライン説」にもとづくサステイナブル・ツーリズムを勘案すると、これまで問題視されてきた「経済」と「環境」、および「経済」と

に有用なツーリズム形態であることが理解できる。特に、これまで問題視されてきた「経済」と「環境」が対峙せず、むしろ両輪の関係にあることは刮目に値する。

関連企業、地域住民、観光客の3者それぞれに、星空に対する新たな動きを生み出したことである。大学などの専門機関が「文化の仲介者」の役割を果たすまちづくりのあり方は、アストロツーリズムを通したまちづくりモデルとして普及させることができると考えている。第二は、アストロツーリズムがサステナブル・ツーリズムを実現しうる新たなツーリズム形態であるということである。とりわけ、「経済」と「環境」が両輪の関係にあることは刮目に値する。

本報での議論はあくまでも試論的なものであって、実証的なデータをもとにしたそれではない。今後は、町民への聞き取り調査や、アンケート調査などを通じて、より実証的なアプローチでアストロツーリズムとサステナブル・ツーリズムの関係性を模索していく。与論町での取り組みはまだ緒に就いたばかりである。今後も和歌山大学観光学部では、アストロツーリズムに相応しい観光地空間形成のための支援を継続的に行っていく。またアストロツーリズムに関する研究は、とりわけ国内ではまだ十分な研究がなされていない。観光は、その社会的効果が多岐にわたる現象であるため、自然科学、人文・社会科学の垣根を越えた学際的な議論が求められている。本報が、アストロツーリズム研究の糸口になれば幸いである。

参考文献

- 大橋昭一(2019)『サステナブル・ツーリズムの研究』和歌山大学国際観光学研究センター
卯田卓也・磯野巧(2019)「観光資源としての星空の構築—沖縄県石垣島における星空ツーリズムの発展を通して」『地理空間』12(3). pp. 277-294.
澤田幸輝・尾久土正己(2020)「アストロツーリズムをめぐる一考察—鹿児島県与論町を事例に」『日本デザイン学会第三支部研究発表会概要集』pp. 23-24.
柴田晋平他(2007)『星空案内人になろう！—一夜空が教室。やさしい天文学入門』技術評論社
島川崇(2002)『観光につける薬—サステナブル・ツーリズム理論』同友館
安村克己(2001)『観光—新時代をつくる社会現象』学文社

質疑応答

Q：少なくともしばらくは、頻繁な相互訪問、大人数の訪問が難しい時期でしょう。「居住地を離れ、現地に行く」ことをせずに、美しい星空をどう共有するか、大変難しい問題ですが、大きな挑戦でしょう。どのようなところから切り込みましょうか。(和歌山大学・富田晃彦さん)

A：富田先生、ありがとうございます。ご指摘の通り、移動を伴う観光は当面の間は難しく、観光関連事業者の皆さまにおいては苦しい状況が続くことと思われます。こちらとても難しい問題ですが、下記でいくつかの切り口を提示させていただきます。

①映像コンテンツの活用を進めていく。緊急事態宣言や扇動的なメディア・ネット情報の影響で、観光をしたくても移動できない人が大勢いることと思います。そういった潜在的に観光に興味のある人に対して、映像コンテンツを用いて常に情報を発信していくことが、コロナ収束後の集客確保につながるのではないかと考えています。

②十分な対策を講じた上での実施。アストロツーリズムは、少人数で行われるケースが多く、「三密」になりにくい観光形態です。望遠鏡のレンズには手を触れない、もし手を触れた場合はアルコール消毒を徹底するなど、十分な対策を講じればツアーの催行は可能であると考えています。ただアストロツーリズムは、山間部や島嶼地域など人口の少ない地域で催行されるケースが多く、住民の皆さんにとっては「よそもの」が来ることを不安に思うかもしれません。地域住民の方々にもツアー内容を丁寧に説明することが重要なことと思います。

③地域住民向けのツアー催行。観光の現場では、観光関連事業者と地域住民との間で、何となく「壁」があることがよくあります。観光客を相手にできない今だからこそ、地域住民向けのツアーを行い、地域住民の皆さんに、観光関連事業者の皆さんが普段何をしているのかを理解してもらう機会を持つのではないかと考えます。観光関連事業者だけでなく、地域全体で「星空」を売り出す基盤をつくっていくことは、持続可能な観光まちづくりにおいて大切なことと考えています。